

【結果】 治療開始時の臨床背景に有意差を認めなかった (A群/B群: 尿蛋白;  $1.27 \pm 1.72 / 0.98 \pm 1.12$  g/gCr, IgG;  $1,011 \pm 338 / 1,149 \pm 162$  mg/dl, IgA;  $336 \pm 178 / 332 \pm 112$  mg/dl, CD3;  $75 \pm 8 / 75 \pm 4\%$ , CD20;  $9 \pm 3 / 10 \pm 3\%$ , CD4/8比;  $1.4 \pm 0.4 / 1.5 \pm 0.5$ )。治療6か月後において尿蛋白0.3g/日未満の症例はA群4名/B群4名、血尿なしの症例はA群4名/B群5名、IgG、IgA、CD3、CD20、CD4/8比に有意差は認めなかった。これらの投与1、2、6か月間の変化率も有意差は認めなかった。

【結論】 mPSL 0.5gと1gでは免疫学的指標、治療効果に有意差は認めず、mPSL 0.5gで効果が得られると考えられた。

### P3-48.

#### 閉塞性動脈硬化症の病変部位と $\omega$ 脂肪酸に関連に関する研究

(心臓血管外科)

○岩崎 倫明、西部 俊哉、鈴木 隼  
室町 幸生、藤吉 俊毅、岩堀 晃也  
猪野 崇、高橋 聡、戸口 佳代  
神谷健太郎、岩橋 徹、小泉 信達  
萩野 均

(公衆衛生学)

安部由美子、井上 茂

【背景】 近年、閉塞性動脈硬化症 (ASO) の危険因子としてEPAやDHAの様な $\omega$ -3系脂肪酸との関連が指摘されている。

【対象と方法】 2011年8月から2013年11月までの98例 (男性79、女性19、 $73.0 \pm 7.3$ 歳) が対象。喫煙の既往72例 (73.5%)、喫煙中37例 (37.8%)。平均BMI:  $22.4 \pm 3.3$ 。高血圧72例 (73.5%)、脂質異常症50例 (51%)、DM43例 (43.9%)、IDDM18例 (18.4%)。既往症は、脳梗塞31例 (31.6%)、心筋梗塞36例 (36.7%)、血液透析13例 (13.3%)。ASOの重症度は、重症虚血肢 (Fontaine III/IV度)26例 (26.5%)、平均ABIは $0.56 \pm 0.21$ であった。患者を末梢動脈病変 (鼠径部以下の動脈病変) を有する患者72例と有さない患者26例に分けて、 $\omega$ 脂肪酸と各因子 (年齢、性別、BMI)、重症虚血肢、ABI、高血圧、脂質異常症、糖尿病 (DM)、脳梗塞・心筋梗塞の既往、血液透析との関連を検討した。

【結果】 DHA  $139.2 \pm 53.3$ 、EPA  $70.45 \pm 41.37$ 、DHA/AA  $0.83 \pm 0.32$ 、EPA/AA  $0.42 \pm 0.24$ 、T-Chol  $176.4 \pm 36.2$ 、HDL  $46.3 \pm 13.9$ 、LDL  $99.8 \pm 33.5$ 、TG  $151.7 \pm 85.9$ 。末梢動脈病変に有意な危険因子はABI低値、DHA低値、EPA+DHA低値、TG高値、重症虚血肢、糖尿病、IDDMであった。多変量解析では、末梢動脈病変の発症に有意な独立危険因子はABI低値 ( $p=0.010$ )、DHA低値 ( $p=0.037$ )、重症虚血肢 ( $p=0.045$ ) であった。

【結語】 末梢動脈病変の存在がABI低値、重症虚血肢の原因となる一方、DHA低値が末梢動脈病変の発症につながっていると推測された。DHAはEPAと異なる抗動脈硬化作用を有していると考えられた。

### P3-49.

#### Person-Centered Careの概念分析 — 慢性疾患患者ケアにおいて — (第2報)

(医学部看護学科)

○山岸 直子

【目的】 慢性疾患患者ケアにおける person-centered care の概念を明確にする。

【方法】 概念分析の方法は、Rodgers (2000) の概念分析のアプローチ法を用いた。文献の抽出は、MEDLINE、CINAL、医学中央雑誌を用いて行った。分析は、帰納的、主題的な方法で実施した。

【結果】 属性として、〈患者と看護師の信頼関係の構築〉、〈患者の自己管理に向けた患者と看護師の協働〉、〈患者の家族・重要他者も含めた全人的ケア〉、〈患者の視点を自己管理に組み込んだ個別的ケア〉、〈患者ケアの調整〉、〈患者の自己管理能力の発展〉の6つが明らかになった。先行要件としては、〈組織的ケア環境〉、〈看護師の価値・信念、態度〉、〈看護師の能力〉、〈看護師の経験の内省〉、〈患者の人口統計学的な特質〉、〈患者の価値・信念〉、〈患者のパーソナリティ、コーピングパターン〉、〈患者の能力〉、〈患者の経験〉の9つが見出された。帰結として、〈患者のヘルスアウトカムの向上〉、〈経済的効果〉、〈患者の医療者とのコミュニケーション能力の向上〉、〈患者のケア満足度の増加〉、〈ケアの質の向上〉、〈看護師の看護援助における満足度の増加〉の6つが見いだされた。